



覚えているのは

5月9日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

5月9日のおはなし「覚えているのは」

老人はまだ眠りから覚めない。

おれは部屋の中をゆっくりと移動し（テーブルの猫足につまずいたりティーカップをひっかけたりスタンドをなぎ倒したりしないように気を配りながらゆっくりと移動し）、戸口へと近づいて行く。浮き彫りの施された立派な扉だ。もう少しでこの部屋から出られる。そう思った瞬間にはたと困惑する。このかっこうで部屋の外に出るとまずそうだ。

整理しよう。ここがどこだかおれにはわからない。ただ大層豪勢な部屋で、恐らくはおれなんか想像もつかないような歴史ある上流階級の邸宅らしいことはわかる。ふかふかの絨毯。マホガニーだか何だかわからないが表面が黒光りするばかでかいデスクや天井（3メートルはあろうかという天井）まで届く本棚。金銀の糸で刺繍され縁飾りが垂れるゴージャスなベッドカバーのかかった特大サイズのベッド。

そう。ここは寝室だ。ベッドには老人が寝ている。顔しか見えないので男か女かわからないが、とにかく年老いた人間だ。それは何者か？ もちろんわからない。どうしておれが老人の部屋にいるのか、それもわからない。前提も何もなく、気がついたらおれはベッドサイドに立って老人を見下ろしていた。老人が寝息も立てずに横たわっている様子をただじっと見ていた。

我に返ってあたりを見回してここはどこだ？といぶかしく思い、それから自分が真っ裸なことに気づいて仰天した。なんだ？ なんだ何だ？ どうしておれは真っ裸なんだ？ どうしておじいちゃん（だか、おばあちゃん）だかを見つめているんだ？ どうして真っ裸で誰だか知らないが豪勢極まるお金持ちのお屋敷の寝室でおじいちゃん（だか、おばあちゃんだか）を見下ろしているんだ？

おまけにおれは自分が勃起していることに気づいて啞然とする。これは何だ？ どういうことだ？ おれはおじいちゃん（だか、おばあちゃんだか）に催すような趣味はない。なのにおれのものはこれ以上ないくらいにそそり立ち、びくんびくんと脈打って、下手をするとほんのひとさすりで射精してしまうのではないかというくらい、はち切れんばかりの状態だ。

とにかく退散するしかない。
こんなところを誰かに見つかったら厄介なことになる。
どこからどう見ても、それだけは間違いない。

老人を襲う変態男として突き出されてしまう。万一この老人が政界だか財界だかの有名人だったりした日にゃ新聞沙汰にもなってしまう。そんなことになったら間違いなくおれの人生は終わりだ。そろりそろりとベッドから離れる。ベッドサイドテーブルに置かれた水差しやら眼鏡やらを落としかけてひやっとする。もっともこの絨毯なら何を落としてもふんわりと受け止め、大した音は立てないだろうが。

けれどもようやく戸口にたどりつこうという時になって更なる困難に気づく。この部屋の外には老人の家族がいるかもしれないし、こんなお屋敷のことだから執事やらメイドやらがいるかもしれない。わんさかいるかもしれない。メイド喫茶のメイドではなく正真正銘のメイドが。正真正銘のメイドがわんさかうろろうしているかもしれない。正真正銘のメイドの前に一物をそそり立たせた全裸男が出て行ったらどうなる？

その想像がいまのおれには少々刺激的過ぎたようで、その情景を脳裏に思い描いただけでほとんど射精しかかった。その瞬間。

「スマートフォン」

誰かが言った。

「え？ 何だって？」

おれは思わず声を出して聞き返してしまった。精液の放出を寸止めにされた生殺しの状態に気をとられて、つい油断していたのだ。

「スマートホンが砕かれるよ」

老人が口を開いたのかと思ったが、そうではなかった。老人は今なお目も口も閉ざして眠り続けている。

「スマートホンが砕かれ咲き乱れる川のこずえだ」

ばさばさばさっと羽ばたきの音がして、振り向くと鳥かごの中でやけに大きな極彩色のオウムが左目でこちらをじろじろ見ている。

「スマートホン」

オウムが言った。ベッドで老人が身じろぎした気がする。まずい。老人が目を覚ましてしまう。オウムがこれ以上喋らないようにするにはどうすればいい？

「スマートホンスマートホンスマートホン」

「クラウンったら、またそんなことを言って」いきなり若い女の笑い声がして部屋のドアが開いた。「スマートフォンって言える？ ホンじゃなくてフォン。もう。おじいちゃんのせいで変な言葉……え？」

女性はおれの方を見て立ち止まった。入ってきたのはメイドではなく、ごく普通のブラウスを着た二十歳前後の女性だった。ドアに手を添えたまま、若い女はじっとこちらを見ている。最悪だ。最悪の事態が訪れた。おれはもう破滅だ。この先一生変態男のレッテルが貼られる。さっきの想像とは裏腹に勃起は一瞬にしておさまり、おれのものはだらりと力なく股間にぶら下がった。

けれど女はおれを見ていたのではなかった。いや、後からわかることだが、確かにおれを見ていたのだが、そこに立つおれを見ていたわけではなかった。女ははっと息をのむとおれに向かって突進し、おれの中を通り抜けてベッドに駆け寄った。

「おじいちゃん？ おじいちゃん？」

その声を聞いておれは何もかもがわかる。可愛い孫娘の声だ。忘れるわけがない。少々ボケて最近では誰が誰だかわからなくなっていたが、おまえのその声はわかるよ。おじいちゃんならここにいるよ。どうやら外に出ちゃったらしい。からだの外にね。百年近く付き合ったからだの外にね。クラウン、手伝ってくれないか。孫に挨拶をしたいんだ。

「スマートホンスマートホンスマートホン」

まったく。使えないやつだ。教えてやっただろうが。バイバイとかゴキゲンヨウとか、こういう時に使えそうな言葉を。けれどその瞬間、おれのぼやき声を聞いたかのように若い娘はぱっとこちらを振り向き、「おじいちゃん」とつぶやく。目が合った、ような気がする。覚えているのはそこまでだ。

(「スマートホン」 ordered by tom_leo_zero-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」
をご活用ください。

覚えているのは

<http://p.booklog.jp/book/35444>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35444>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35444>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.